

風ちゃんありがとう

鹿児島県 鹿児島市立宮川小学校六年 森田 峻介

ぼくは、三人兄弟の真ん中、次男です。

弟とは九才年がはなれているので、四年生までのぼくの立場は常に弟、末っ子でした。ぼくは何をしても兄の後ろを追いかけて、兄と比べられ、たまに、ぼくが努力して、うまくいっても周りの人は、ぼくを認めるのではなく、「やっぱりお兄ちゃんがいると弟くんもすごいね」と兄の存在をほめます。こんな言い方をされるのが、ぼくは、きらいで、兄にしつとすることも度々ありました。

そんなぼくも兄となつて三年になりました。

母のおながが大きくなつていくにつれて、ぼくもお兄ちゃんとしての意識が高まつていき病院の先生が、お母さんのおなかの様子をぼくに教えてくれていたのを思い出します。弟はやや大きく、その後も病気知らずといつていくらい元気に育つてくれました。ぼくは授乳以外は何でもするといふほどお世話もがんばりました。

弟がぼくの指をキツとにぎりしめてくれた感じよくも覚えています。それに、初めてなみだを流した時、スポイトで吸いとりうとしたことも今ではもう、笑える話になりました。

弟が十ヶ月ごろから保育園に行き始めて、親がむかえに行けないときは、一キロくらの道のりを重いかばんと、弟をおんぶしながら、むかえて帰る事もよくありました。

やっぱり大変だけど、風ちゃんは、かわいいし、親から頼られた時もうれしかったです。

三才になった今、弟は、悪知恵がつき始めて困らせる事もあるようになりました。スーパードでわがままを言い始めると母はすぐに買い物をやめて帰ります。家でも、泣きさけぶと、周りを気にして顔が変わります。どうして世間の目を気にするのだろうか、こんな行動も成長の過程なんだとぼくは思います。

でも弟は、ボール遊びや、自転車、鉄ぼう、つり輪、ぶらんこ、夏のプール遊びなど体を動かすことは、三才とは思えないくらい得意です。周りの人もすごいとびつくりします。ぼくも弟がほめられているのを見ると、うれしくなります。

まだ弟には、わからないだろうけどぼくは兄の気持ちも弟の気持ちも分かります。なのでそれを生かして生活をしたいです。

そして、ぼくを、兄の気持ちも教えてくれた弟の風介に感謝の気持ちもこめながら、弟が大きくなったとき、ぼくの存在を喜んでくれるように、これからも成長の手助けをしていきたいと思えます。